堀江マサ子著
『高校作文教育の探究』

一九八一年の前著『高校作文教育の実際』に続く著書である。古典や現代文を読むことと作文を関連させた実践例や小論文指導の実践例など豊富な実践を中心にした内容となっている。

著者は作文教育の根幹を以下のようにまとめている。

（一）生徒と教師の心の関係を密にさせること
（二）生徒にその人独自の持っている文章スタイルを想起させること。
（三）聴写によって、生徒自身の文章リズムを想起させること。
（四）読むことを自分自身の書くことの中に組み込ませること。
（五）書く主体の生徒の生活を書く内容にコンポウズさせること。

作文の文体や内容が生徒の生活にねざしたものになるような指導が必要であることを言っているのである。

作文を教える著者自身も「書く生活」の中に身を置いている。第四章の「高校作文指導への修練」において自身の書かれた文章を五編ほど載せられている。載せた文章については筆者は「あまり推敲しないで気楽に書いた」としている。載せられた五編の文章を見ると、楽しいながらも格調のある文章となっているように感じられる。指導者自身も書く生活の中に身を置いて、書く生活の大切さや楽しさ、そして厳しさを知るべきではないかということを言っているように感じられるのである。

（A5判　二四六ページ　一九九五年三月　渓水社　二五七五円）
（田代　智則）